

高齢者疑似体験が大学生の高齢者イメージに与える影響

Impact of Aging Simulation on University Students' Views of Older Adults

○大谷海誠¹⁾・濱美乃里²⁾・中北千景²⁾・春日彩花²⁾・土田宣明²⁾

Kaisei OTANI, Minori HAMA, Chihiro NAKAKITA, Ayaka KASUGA, Noriaki TSUCHIDA

1) 関西エアポート(株) 2) 立命館大学

1) Kansai Airports 2) Ritsumeikan University

Key words: ageism, aging simulation, IAT, FSA

目的

高齢者はエイジズムの主たる対象とされ、一般的に、否定的なイメージと結びついている (Palmore, 1999)。このエイジズムは、教育や体験を通して変化しうるとされている。そのため、高齢者の身体機能の理解や共感性を高めるなど、高齢者理解を促すことで、エイジズムを低減させる可能性がある。一方、エイジズムには、潜在的側面と顕在的な側面の 2 つの捉え方がある。しかしこれまでの研究は、顕在的な側面にのみ焦点を当てたものが多かった (Gerhardy et al., 2022)。

そこで本研究では、高齢者疑似体験を通して、大学生の高齢者に対するエイジズムがどのように変化するのかを、顕在的／潜在的両側面から明らかにすることを目的とした。

方法

参加者 立命館大学大阪いばらきキャンパスに通う大学生 31 名 (男性 17 名, 女性 14 名) を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は 20.4 歳 ($SD=1.15$) であった。

装置 1. 日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版 14 項目 (以下 FSA と表記) : 顕在的なエイジズムを測定する基準として、原田ら (2004) が開発した尺度を使用した。2. 潜在連合テスト (以下 IAT と表記) : 潜在的な意識や態度を測定するためのものであり、PC を用いた課題である (Greenwald et al., 1998)。3. 高齢者疑似体験セット : 高齢者の身体の動きを疑似的に再現するために、株式会社三和製作所が開発したものを使用した。

手続き 実験参加の同意後、IAT, FSA の順に回答を得た。その後、高齢者体験の指示を行い、体験セットを装着した。装着後、B6 判の紙に氏名と学籍番号を書く作業、冷蔵庫から水を取り出し、紙コップに移して飲む作業、水と紙コップを片付ける作業を実施した。その後、3 分程度の休憩を取り、再度 IAT, FSA の順に回答させた。その後、個人属性に関するアンケートに回答した。

実験はすべて立命館大学大阪いばらきキャンパス内にある生活行動実験室で行った。

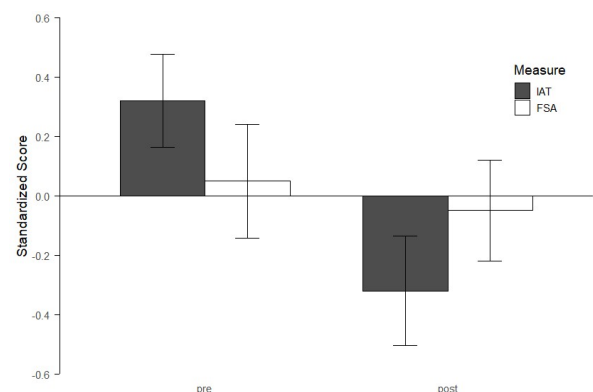
結果

高齢者体験の pretest と posttest の間で、FSA の得

点 (14 点から 70 点の値をとり、数値が高いほどエイジズム傾向が強い) と、IAT の D 値 (+2 から -2 の値をとり、数値が高いほどエイジズム傾向が強い) を比較した。FSA の合計得点に関しては、pre: $M=32.03$ ($SD=8.00$), post: $M=31.293$ ($SD=7.08$) となり、有意な差がみられなかった ($t(30)=1.40$, $p=.172$)。IAT の D 値に関しては、pre: $M=0.98$ ($SD=0.26$), post: $M=0.79$ ($SD=0.31$) となり、統計上有意な差がみられた ($t(30)=3.58$, $p<.001$, $d=0.643$)。さらに、高齢者体験の前後 (pre, post) $\times$ 測定方法 (FSA 得点, IAT の D 値を標準化したもの) の二要因分散分析を行った (Figure 1)。その結果、高齢者体験の前後と測定方法間での交互作用が有意であった ($F(1, 30)=7.80$, $p<.001$, $\eta^2=.019$)。分析の結果、IAT(D 値)でのみ、pre-post 間での値の低下が確認された ($F(1, 30)=12.82$, $p=.001$, $\eta^2=.104$)。

Figure 1

高齢者体験前後の IAT・FSA 標準化得点比較



考察

高齢者体験前後で、顕在的指標 (FSA) に大きな変化はなく、潜在的指標 (D 値) が大きく低下 (高齢者一不快の結びつきが低下) した。このことから高齢者疑似体験セットを用いて、高齢者の身体感覚に近い体験をすることは、体験者の意識レベルでのエイジズムに影響しにくいものの、無意識レベルでは影響することが示唆された。

参考文献

Gerhardy, T.H. et al. (2022). *Eur J Ageing*, 19, 53–976.